



Structural Behaviors of Super HISLEND-H

要旨

スーパーハイスレンドHの製造実績に基づく機械的性質のばらつきを考慮したH形鋼の面内弾塑性挙動解析より、スーパーハイスレ





Fig. 2 Loading condition

対象も限られているため、本結果から直ちにスーパーハイスレンドHが十分な塑性変形能力を有しているとは言えないが、実際に使用される軸力比0.4以下の領域では塑性変形倍率は8以上となっており、実用上問題はないと考えられる。

### 3 鉛直スチフナ形式SRC柱-Sはり接合部の力学

とおりであり、軸力比 ( $p$ ) は0, 0.2, 0.4 および0.6 の4種類とした。

解析では、まず、各軸力比に対するモーメント-曲率関係を求め

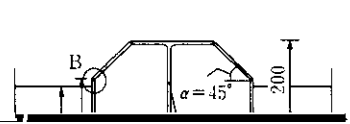
#### 的挙動

##### 3.1 研究目的

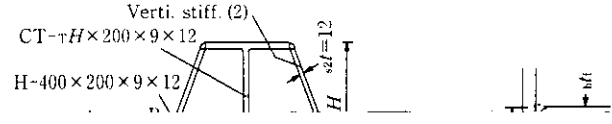
げモーメントが漸増すると仮定する。なお、残留応力は無視する。  
次に、このモーメント-曲率関係を田代CNC法 (column defl.

部の補強には通常水平スチフナが用いられる。しかし、水平スチフナ形式では、この大撓曲の問題が、その結果として

(a) B-series



(b) C-series



(1) 崩壊機構 (T)

鉛直スチフナの降伏形が引張降伏形の場合に適用する。この場合、崩壊機構は森田らの示すものと同一であり、接合部耐力



Table 1. Comparison of experimental and analytical results.

Specimen	Failure mode	Load capacity (kN)		Displacement at failure (mm)
		Experimental	Analytical	
SH-1	Concrete crushing	1200	1150	15
SH-2	Concrete crushing	1350	1300	18
SH-3	Concrete crushing	1450	1400	20
SH-4	Concrete crushing	1550	1500	22
SH-5	Concrete crushing	1650	1600	25
SH-6	Concrete crushing	1750	1700	28
SH-7	Concrete crushing	1850	1800	30
SH-8	Concrete crushing	1950	1900	32
SH-9	Concrete crushing	2050	2000	35
SH-10	Concrete crushing	2150	2100	38